ヨーロッパの赤い花と雨

karinomaki

ヨーロッパの赤い花

ヨーロッパのある王国に、一人の王女がいました。王女は、地味な性格であったので、王様は、王女にいつも赤いドレスを着せていたそうです。

私は、その晩、王女の家庭教師として王室に呼ばれていました。しかし、その日は王女に会うことはかないませんでした。私が呼ばれた部屋の中から、ものすごいののしりあいが聞こえてきたのです。

「どうして私が王位を継がないとならないのですか！！私は女です。兄上がおられるではありませんか！！」
「理由はひとつしかない。私はあれの生母がきらいなのだ！！」
「そのような子供じみた理由で！！兄上がおかわいそうです！！」

私は苦笑しながら、部屋を立ち去りました。

プライド

次の日の朝、私は興味津々で、王女の部屋にうかがいました。生意気で気が強い、でも、意志のしっかりした女性だと思っていました。

しかし、私を見た王女は、冷たい目をして言いました。「あなたは私の家庭教師だそうですね。でも、あなたには何も教わる気はありません。お引き取り下さい。」

私は腹を立てて言いました。プライドがメラメラと燃えました。
「あなたは、私を王のまわしものだとでもと思っているのでしょう。お見通しですよ。」

王女は明らかにびっくりしていました。そして言いました。

「どうしてあなたは私の考えていることがわかるのです？」

教育

私は言いました。
「昨日のあの王との言い合いは何ですか。あんなのはただのけんかです。もし、あなたが教養を身につければ、王を説得することができますよ。もっと言えば、王になる自信すらつきますよ。教育とは、生きる自信をつくるのです。」

王女の目が輝いたのが私にはわかりました。

ヨーロッパの混乱

その日から、私は王女に政治と哲学を教え始めました。哲学をするものが政治に携わるべきというプラトンの考え方がありました。私には、王女が政権をとろうがとるまいが、どうでもいいことでした。この人に素晴らしくなってほしい・・・それだけでした。
王女は飲み込みが早く、天才性を持っていました。王が王位を継がせようとした理由もわかる気がしました。私は、５年の歳月を、王女とともに過ごしました。私達は何でも対等に話せる間柄になっていました。

しかし、まもなくして、ヨーロッパ全土が大混乱に陥りました。（この話はフィクションです。）革命の波が押し寄せ、それを支持する国と、王政を守ろうとする国、中立の立場の国が戦争状態に入ろうとしていったのです。革命のために処刑された王もいました。

愛

この王室でも、連日このことが話し合われました。王女と私も出席しました。しかし、ほとんど口を開かなかった王女が、ある時驚くべき発言をしました。

「ばかばかしいことです。王政さえなくなれば、この問題は解決します。私は無意味な戦争が起こるくらいなら、死を選びましょう。」

私達は仰天しました。しかし、私はこの時、この王女への愛を自覚したのです。

・・・私が政治哲学を教えたから、この王女はこの結論が出せるのだ。しかし、死なせてはならないのだ。この人を。そして、誰一人として。

宿題

私は王女を怒鳴りつけました。
「何をばかなことを！！死ぬことが正しいのですか？そうなったら、王もあなたの兄上も道連れですよ！！他の方法をあなたの実力で考えなさい！！宿題です。」

次の日から、部屋の鍵を私にだけ預け、王女は書斎に閉じこもりました。

哲学者

王女が書斎から出てこなくなったので、王は私に様子を見に行かせました。鍵を外し、書斎にそっと入った私は驚愕しました。膨大な本が積まれ、もっとすごいことに、王女が書いたと思われる紙がその本のかさに負けじと連なって積まれていました。

「あなたは哲学者になったのですね。」
私は王女に言いました。
「今、出来上がったところです。これを各国の新聞に要約して載せれば、混乱は少しは収まるでしょう。

「よろしい。それは私がしましょう。少しお休みなさい。」

私は、その論文のようなものに目を通しました。革命の正しさ、そして問題点、これからの政治のあり方の理想として、共和制、立憲君主制の正しさが全て書かれていました。国民投票で王政を廃止するべき国は、王は、平民としてか、国民の象徴として生きるべきと書いてありました。王女は無血革命の意味もわかってくれたのです。

雨

果たして、ヨーロッパの混乱は収まり、この理念を誰が書いたのかは謎を呼ぶこととなりました。
その後、王女の兄の妻が妊娠し、生まれたのは女の子で、王女にそっくりでした。その子が生まれた時、雨が降っていました。
王女は庭先で雨に打たれていました。傘を持っていき、「女の子が生まれましたよ。」と告げた私に、王女は言いました。
「私にふさわしい異性は、この雨しかありません。お父様は、私があれを書いたことを秘密にしていますが、いつか公表し、私を女王にしてしまうでしょう。そうなれば、この赤い服を着続け、着飾り続け、私の容姿しか見ない人と結婚させられるでしょう。私は、自然が好きなだけです。先生が、ルソーの『自然に帰れ』を教えてくださったから、革命の不自然さまでも教えて下さったから、あれが書けました。でも、あれを書いたのは玉座にのぼるためではありません。何も持っていない、自然の心に帰るためです。だから、私は、雨と結婚します。この赤い服は、花ですから、雨が好きなのですよ。」

私は王女を抱きしめて言いました。
「私と逃げましょう。生まれた女の子に赤い服は全部ゆずりましょう。
きっとあなたにかわって、ヨーロッパの赤い花になってくれます。あなたは地味すぎて、ちょうど私にお似合いですよ。」

そのあと、王室から王女をさらった私は、ハッピーエンドとはほど遠い、貧しい生活でしたが、今は一人の哲学者となった王女と幸せに暮らしました。

雨が降る度に私はこの日のことを思い出すのです。
雨はヴェールだ。自然に帰った私の赤い花の・・・。